爺爺の俳句ごっこ入門（四）

河村正浩

第三章　祭りと旅

山口県下松市で行われる奇祭・稲穂祭での「狐の嫁入り行列」をカラー写真入りで紹介。

文化の日狐が嫁に来るという

先駆けは園児の鼓笛稲穂祭

練り歩く神輿花神子の洟提灯

裃にちょんまげ花婿のきつね

頬染めて三三九度の狐かな

稲穂祭が縁となりて今の妻

第四章　イメージで詠む

夕焼のカラー写真を見て連作した十五句や、行ったことも見たこともない「よもつ国」や「河童」「雪女郎」などをテーマにして詠んだ句を掲載。中でも雪女郎は私の理想の女性であり憧れだから物語風にしてみた。私の亡き妻とイメージが重なるのである。

いっさいの色を拒みて町吹雪く

逢魔時半身すでに雪女郎

足跡も影も持たずに雪女郎

夢うつつ交わせし枕雪女郎

海へ出て風となり消ゆ雪女郎

亡き妻の夢はいつしか雪女郎

第五章　滑稽・パロディー

改めて滑稽を意識して詠んだ句を並べた。

為家の鳴く亀この頃外来種

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

薔薇の花散散人の嗅ぎし後

脱ぎ捨てしものに躓く夕薄暑

猪垣を砦にヒト科たそがれる

喪中とう人と会いしや初詣

「夢」「希望」燃えているなりどんど焼き

第六章　エロチシズム

三篇の連作だが、読み返すと自作ながら擽ったい。

指の跡つけてしまおか夜の桃

剥くほどに白桃蜜を滲ませる

さり気なく花は蜜ため目白呼ぶ

蜜吸われ花は恍惚散って行く

無花果の熟してからの蛇の飢え

亀の首伸びきっている花あやめ

第七章　写生　植物を詠む

「曼珠沙華」「敗荷（やれはす）」「枯蓮」「桜」などの連作。写生の向こう側に、イメージや心象風景を感じたという嬉しい所感が届いた。

咲き揃いあたかも浄土曼珠沙華

一糸まとわず咲いている死人花

弥生以後の夢を見ている破蓮

枯蓮の地中かすかな息づかい

惜しみなく雨に散る花耐える花

忠魂碑の肌理のざらつき散る桜

第八章　心象造型

象徴的な句ゆえ、入れるべきか悩んだが、私のもう一つの貌でもあることから敢えて加えた。現代俳句協会系の人には興味深いようであった。

桃の毛のももの怪となるリアリズム

和を以てせめて咲かそう小判草

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

まばたきの音がまだする冬の山

うっすらの雪へ温故の顔さらす

すすき原闇の深さに枯れはじむ

竹皮を脱いでロシアンルーレット

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。